剣の四君子

吉川英治

昭和三十一年六月一日印刷
昭和三十一年六月五日発行
昭和三十一年六月二十日再版

定価 二三〇円
地方定価 二四〇円

著作者 吉川英治
発行者 矢貴東司
印刷所 鎌倉印刷株式会社
印刷者 川瀬壬子

東京都千代田区神田神保町一ノ三〇
株式会社 桃源社
電話東京 二九局 四九五一番 四九五二番
振替口座 東京 六四三五一番

劍の四君子

吉川英治

目次

柳生石舟斎……七
林崎甚助……一三
高橋泥舟……一五
小野忠明……一八

表紙絵　小林古径

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

序

題して剣の四君子といふ。少し気取り過ぎたきらひが無いでもないが、剣の相、花の姿、対照はわるくないと、わたくしには感じられる。

菊の高雅な匂ひ、春蘭の身を懸崖に置きながらの優しさ。雪を凌ぐ梅花の芳烈。水仙の沈潜と謙虚な冷徹。どれも剣の精進と似通はぬはない。

剣に仕へた古人の行道ほど、きびしい道はなかつた。妄想を憎むこと仇の如く、懶惰と嬌慢をつつしむこと敵国を視るやうだつた。ひたぶるに勝たんとした。が、勝つても勝つても、唯の強さだけでは、なほ甘んじられぬものだつた。真の剣人とは、

おのれに勝つ

ことを得た者でなければならない。人生に勝つた事でなければならない。それは不断鍛

錬と、人間的火華に自分を灼く生活のもとに、修行として営み励まれて行つた。

剣は個性の道である。為に彼等のすがたは余りに孤高独歩の人に見える。時に、世間からは白眼視され、さびしさ、うらがなしさ、いひようもない人に見える。狂者にちかい姿まで見せる。

けれど、風雪の中に、人間の発しうる最高度な生命の火華をしめし、また花のやうな香気を研磨の人柄にたたへるなど、剣の道はやはり東洋人の心には何か捨て難い魅力をなす詩であるにはちがひない。

今、古い筐底から、四花の古人を選んで、一瓶の書幀に挿してみた。春風の芳気、霜雪の道明りとはゆかない迄も、これが手枕の人の眺める壺となつて、ふと何かを興の琴線に奏でうれば幸甚である。

著　者

柳生石舟斎

草廬の剣

一

新介は、その年、十六歳であつた。

大和国神戸ノ庄、小柳生城の主、柳生美作守家厳の嫡男として生れ、産れ落ちた嬰児の時から、体はあまり丈夫なはうでなかつた。

母なる人が、青梅の実に中つて、月盈たぬうちに早産したせゐだとか。いはゆる月足らずの子であつたとみえる。

「戦に出たい。戦に連れて行つて下さい」

彼も、武門の子である。合戦のあるたび父にせがんだ。

が、父の家厳は、

「そちのやうな弱い肉体では、戦ひに出ても物の役に立たぬ。柳生の一族は、病弱な子まで狩り出したと、敵方に笑はれよう。——さういふ望みは断つて、むしろそちは僧侶になれ、学問をしておけ。柳生家の累代、戦に次ぐ戦に、代々何十名の戦死者があつたか数も知れぬほどだ。そちの兄、康太郎も二上山の合戦に討死した。叔父御もをととしの出陣から帰らなかつた。……なう、さういふ人々の霊を弔ふべく、僧門に入るのも意義のないことではない。そちの体の生れつきひよわいのは、一族の中から一子はそれに捧げよとの、仏天のおいひつけかも知れないのだ。宿命といふものである。いらざる憂悶は抱かぬがよい」

と、懇に諭すのであつた。

「……」

新介は、黙つて聞いてゐるが、いつも涙をこぼした。顔を横に振るたび、その顔から涙が飛んだ。

「わからぬやつ！　女のくさつたやうなやつ！　嫌ひだつ、彼つ方へ退がれつ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

果は、その涙へ、恐い顔を示して、家厳は大喝した。
それも、父性の大愛から迸しる声以外なものではない。
ところが。
ことし天文十三年の七月には、その父が好むと好まないに関はらず——子が望むと望まないに関はらず——否応のない戦火が、柳生父子を、一つ戦場に捲き落した。
連年、鎬を削りあつてきた宿敵、大和の筒井栄舜房法印順昭が麾下二十万石の領土の精兵を、挙げて、この小柳生ノ庄のわづか七千石足らずの小城ひとつを、取巻いて、
「三日のうちに踏みつぶして見せる」
と、豪語し、そこの山上山下、野も畑も部落も、兵馬に埋めてしまつたのである。
新介は、かうした危急が、わが家の石垣の下まで迫つたのを眺めやると、
「もう父もお叱りはなさるまい」
と、生れて初めての武者ぶるひを——恐怖の快感を、鎧の下の血は楽むのだつた。
そして、昼夜必死の防戦に、彼は搦手から水の手までの線を死守し、父の家厳は、一族と共に、専ら大曲輪の指揮に当り、時には自身、大手の木戸まで出て、士卒と共に奮戦し

てゐた。

二

石垣は血にそまつた。

その血が黒くならないうちに、次の敵が、又石垣につかまつて攀ぢ登つてくる。

岩石、材木、沸湯——糞泥までを、執念ぶかいその敵に浴びせかけた。

「多聞院日記」の記事によれば、この時の激戦は、三日に亘るとあるが、「柳生家家譜」には、七日を過とある——

何にしても、相互、夥しい犠牲を出して、揉み戦つた酸鼻は分る。

筒井勢は、小柳生の在家散郷へ火をつけたから、その煙りは、天を焦がし、畑はふみ荒され、百姓のすがたはおろか、家畜の影も絶えてしまつた。

糧食の道、水の手の落口も、断たれてしまつた。城中の兵は、眼に領内の焦土をながめ、身のまはりには、飢渇か死の影しか見られなかつた。

が、猶も城は、頑強に落ちなかつたので、筒井順昭は、自身伊賀を発して、忍辱山に陣

を取り、

「これしきの小城に、七日もかかつて、なほ落ちぬと四隣に聞えては、筒井衆の名折れぞ」

と、激励した。

順昭は、後の筒井順慶の父にあたる人である。順慶とちがつて、英武な名将と知られてゐた。——その忍辱山の陣所へ、柳生方の捕虜が一名、高手小手に縛られて来た。

その晩も、諸所の放火、野火、陣地々々の篝などで、夏の夜空は、真っ赤に煙つて、地の草露に虫の音もなかつた。

「坐れっ」

「それへ直れっ。——直らんかっ」

縄付の弱腰を蹴つて、一群の将士が、床几の前へ突きのめした捕虜を一目見ると、筒井順昭は、

「ああ待て。手荒にするな」

と、思はず眉をひそめずにゐられなかつた。

三

「女か。病人か」

順昭は、まづ訊ねた。

見るからに弱々しい一名の敵を、大勢して、さも手柄顔に生擒つて来た味方の将士も、むしろ不快とするやうな順昭の語気だった。

「わしは、女ではないっ。病人などでもないっ。——柳生家厳の嫡男、新介宗厳なのだ。はや首を打てっ。首を打て！」

順昭の声に応じて絶叫したのは、彼の部下ではなく、彼の前にひき据ゑられてゐる捕虜だったのである。

「何っ。柳生家の総領ぢやと」

順昭が、思はず眼をみはると、籠手の傷口を縛りながら、縄付のうしろに付いて控へてゐた朝山氏堯といふ赭顔の勇将が、頭を下げて答へ直した。

「幾度、水の手の樋を断ち切りましても、いつの間にか、城内へ水の通つてゐる容子なので、それがしの手勢を伏せておきますと、夜毎、この若武者が、決死の一隊をひきつれて、搦手から裏山へ攀ぢ、貯水池の樋をかけ直し、水路をひいて城内へ走りこむのを見届けま

した。——で、こよひこそと、それがし自身、待かまへて、袋づつみにしましたが、若年とはいへ——又、見たところ、仰せの如く、病人か女かのやうな弱々しい姿に似気なく、死にもの狂ひに抵抗し、味方の兵を、八、九人まで斬りつうけました」

「……ふムう?」

順昭は、呻きながら、毅然としてゐる捕虜の色白な面に、じいつと、眸をすゑたまま聞いてゐた。

「——憎ッくい小冠者めがと、それがしが槍を突けると、それにをる野添盛八、漆間八郎右衛門の両人も、左右から力を協せ、追ひつめ追ひつめ、扇形の空濠の窪へ、敵が足ふみ外して転げ落ちたので——討つなと、野添の槍を止めて引つ縛げて参つたのでござります。——縛め捕つてから気づいたのは、意外にも、それが城主柳生家厳の息子であつたといふ事です。さして手柄とも存じませぬが、他ならぬ敵将の嫡子、君前に献げるのが至当と考へ、物々しう思召されましたらうが、ともあれこれへ引つ立てて来た次第でございまする」

「さうか。……いや、よく縛めて来た」

順昭は、初めの気色を改めて、

「小冠者、面を上げろ」

と、柳生新介を、睨めつけて、もう語気の端にも、不愍などはかけてゐなかつた。

新介は、死闘に燃やした眸を、まだそのまま持つて、容こそ、自若としてゐたが、

「面は上げてをる。これ以上あげて、天を笑へといふか。首を刎ねる際には、頸は伸すものと心得てをる。いらざる多言はお互ひに無用であらう。はやく首を打てつ」

と、さすがに声は甲走つてゐた。

四

暁早い短夜。——濛々とこめる戦雲と朝霧に明けて、夜もすがら戦ひ通した籠城の兵に、ふたたび飢餓と、炎暑と、重い疲労が思ひ出された朝の一瞬。

「新介様あつ」

「若殿うつ。——若殿には、何処に」

搦手の兵たちが、大曲輪から大手の辺までを、血眼に、捜し合つてゐた。

それと同じ頃に、望楼の上では、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.